

# 桃咲く里

佐久市立平根小学校  
学校だより8月号  
令和5年8月29日  
文責：教頭 原 武尚



## 2学期が始まりました

8月24日（木）に、2学期の始業式が行われ、82日間の2学期が始まりました。校舎や校庭に子どもたちの声が響き、廊下には夏休みに作った工作や自由研究が展示され、子どもたちの表情からは、充実した楽しい夏休みを過ごしてきた様子が感じられ、学校に活気が戻ってきました。

さて、2学期は、8月の暑い中で始まり冬休みに入る12月に終わるといって、とても長く、様々な変化に富んだ期間になります。農作物が実りの秋を迎えるように、子どもたちにとっても学習をはじめとした学校生活全般で実りを迎える時期になります。3学期は、この2学期の成長の手応えを持って、次の学年の準備に入ります。2学期は、そんな大事な学期になります。

2学期は、修学旅行や社会見学、もみじマラソン等、行事もたくさんありますが、今年度は、150周年記念に関わる活動があります。9月20日の空撮やバルーンリリース、11月10日の記念式典など、とても楽しみな行事ですね。子どもたちだけでなく、是非、保護者の皆様、地域の皆様にもこの大きな節目を共に祝っていただけたらと思います。ご協力、よろしくお願いいたします。

## 校長室より

### 違いがあるからおもしろい

校長 長澤 永子

4月より校長として赴任してまいりました長澤 永子と申します。よろしくお願いいたします。赴任して5ヶ月が過ぎようとしています。子どもたちの授業や活動の様子を見に校内を回っていると、「校長先生!」と多くの子が声をかけてくれます。とても人なつっこく、子どもたちのキラキラとした眼差しを目にするたび、平根小の子どもたちの輝きに癒やられるよう邁進していこうと思います。

何気なくつけたテレビで、世界的指揮者の小澤征爾氏がインタビュー番組に出演し、次のように語っていた。

「演奏者全員の音がピッタリとそろっているなんて、気持ちが悪い。他と少しずれている音があって、それを押ししたり、引いたり、受け入れたりする。違いがあるから音楽はおもしろいんだよ。」

現在の「セイジ・オザワ・松本フェスティバル」の前身である「サイトウ・キネン・フェスティバル」の時代に、彼が指揮するオーケストラの演奏を聞いたことのある私にとって、それは意外な言葉だった。音楽は好きだが、その善し悪しを語るのとはおこがましいが、それでも彼が引き出すオーケストラの音色には、聴く者の心をとらえる力があると感じていた。それなのに、当の本人が「全員の音がそろっているのは、気持ちが悪い」と言っていたからだ。

一方で、彼の言葉に妙に共感する私もいた。オーケストラの指揮者の心境が、授業をする教師のそれと通ずるところがあるように感じたからだ。私たちは、様々な子どもたちが同居する“学級”というオーケストラの前で授業をする。勉強が得意な子もいれば、苦手な子もいる。意欲的に取り組める子もいれば、なんらかの事情で学習に前向きになれない子もそこにいるのである。それらの多様な子どもたちを前に、すべての子が理解を示し、できなかったことができるようになる授業をしたいというのが私たちの願いである。しかし、それがとてつもなく困難なことであることを私の体は知っている。それでも理想を求めて悪戦苦闘してきた。その悪戦苦闘の中で、そっぽを向いていた子の眼差しが一瞬自分に向いたとき、あるいは「算数嫌い」と言ってはばからなかった子が鉛筆片手にじっくりと考え込んでいる姿に触れたとき、私たちは得も言えぬ幸福感を感じる。「ああでもない。こうでもない。」と言って、授業について語り合ってきた私たちが求めていたのは、小澤氏の言う「押ししたり、引いたり、受け入れたりする」ことだったのでないだろうか、と得心がいく思いになった。

かつて「ふぞろいの林檎たち」という高視聴率を獲得したテレビドラマがあった。それぞれに個性を持つ主人公の青年たちが、家族や仲間や社会と向き合いながら生きていく人間模様を描いたドラマである。彼らは、彼らを取り巻く様々な人々から「押されたり、引かれたり、受け入れられたり」して、その存在を示していった。私たちの目前にいる子どもたちも、まさに“ふぞろいの林檎たち”である。彼らにどう働きかけ、どう受け入れていくか。それが私たちにとっての最大の課題である。「違いがあるからおもしろい。」そんな小澤氏の言葉が胸に響く。